

## 二臣を従えた聖徳太子像

——静岡・個人蔵太子三尊像と「垂迹太子」像の諸相——

《キーワード》童形太子 三尊形式 観音の垂迹 時空の超越

石川 知彦

(大阪市立美術館主任学芸員)

はじめに

二〇〇一年秋から本年春にかけて、東京・大阪・名古屋の三都市において「聖徳太子展」が開催されている。この展覧会は、太子が活躍した飛鳥時代の名宝から、太子信仰の所産たる絵画や彫刻など、延べ二二七件が出品されている大規模なもので、数多くの観覧者を集めている。幸いにして本展の開催に関わることのできた筆者は、展覧会図録の中で拙文<sup>1)</sup>を掲載させていただいた。この拙文は、近年の聖徳太子像研究を画するといつてよい小山正文・津田徹英両氏の成果<sup>2)</sup>に導かれつつ、両氏が取り上げられなかった三尊形式の太子像、すなわち二臣を従えた太子像を中心に駄文を綴ったものである。ところが展覧会図録という性格上、紙数に限りがあったので省略し、十分に言葉を尽くすことができず、また刊行後に訂正すべき点もいくつか判明した。そこで本誌をお借りして前稿を改題し、先

学の新たな研究成果や筆者の知見を若干加えつつ、加筆・訂正させていただきます。いただいた次第である。

### 一、「聖徳太子童形像・二臣像」について

ここで改めて紹介しようとする太子画像は、静岡市内の某氏が、少なくとも戦前から所有している作品で、縦八三・七、横四四・三センチを測る。(挿図1、以下本小論では「本図」と呼ぶ。)一副一鋪の絹本着色本で、裱背に「聖徳太子影像／太子脇侍付」と墨書されている。本図は『聖徳太子信仰の美術』<sup>3)</sup>において、筆者が拙稿<sup>4)</sup>でその存在に触れただけで図版は掲載できず、一九六九年に開催された「飛鳥文化と聖徳太子」展<sup>4)</sup>に出品されて以来、この度「聖徳太子展」<sup>5)</sup>に久方ぶりに出品(図132、以下「聖徳太子展」)に出品される作品はその図版番号を括弧内に記す)、公開されるものである。以下

本図の図様、技法と表現、図像上の特徴を簡単に述べておきたい。

### (1) 図様と像容

画面中央に丈高の礼盤上に坐す太子の童形像を描き、礼盤の手前には衣冠束帯姿の二臣が、太子に比べて小ぶりに表される。背景は一切表現せず、三尊で二等辺三角形を形成し、安定した構図をとる。太子は右斜めを向き、髪を左右にふり分け、耳上にて白紐で結び、紐の先端とともに髪が両胸前に垂下する。右手で団扇（麈尾か）を持ち、左掌で柄の端を支え、礼盤に敷かれた褥に右足を前にして安坐する。丹地の袍衣に白の袴を着し、吊袈裟を偏袒右肩に着け、右肩をわずかに覆う横被は右袖内側から右足元に垂下し、白の糸沓を履く。

両手で持つ団扇状の柄の長い持物は、中央に色彩豊かに宝相華を象って芯となし、そこから放射線状に毛筋を伸ばし、周縁部は金泥線と褐色の色線および金泥の連珠文で縁取る。形状は団扇に近いが、宝相華から毛筋が伸びることから、元来は大鹿の尾の毛を払子状にした麈尾を表して持物としたものと思われる。箱形の礼盤は黒漆塗りに表し、正面に二箇所・側面に一箇所の格狭間を設け、各格狭間の間の上下の框にそれぞれ金具を付す。

束帯姿の二臣は、向かい合うようにして坐す姿を斜め後方から描き、面部も後頭部から一方の側面のみを表す。ともに両手で笏を執り、垂纓の冠を被り、黒の袍衣に石帯を着け、白袴を履いて下襲の裾を後方に伸ばす。面相は向かって右側が口・顎髭を蓄えたやや老相とするのに対し、向かって左側は髭の有無は確認できないが、やや肥満相に表されている。

### (2) 技法と表現

本図ではやや目の粗い画絹を用い、部分的に絹の脱落が見られる。太子は肉身は白、輪郭は朱の細線で描き起し、頬にわずかに朱暈を施す。面部はやや下膨れとし、眉目をわずかにつり上げ、口を結んで凛々しい表情とし、遠方を見据える。上脛は単純な弧の墨線で表すのに対し、下脛はうねりをもたせた朱線とし、髪際近くの毛筋と同様、繊細な感覚が窺われる。

丹具地の袍衣には、金泥線と緑青で表される花丸文を散らし、墨線と金泥線で輪郭と衣襞を表す。輪郭線と衣襞線に沿って朱で色暈が施され、裏地は白とする。偏袒右肩に着けた袈裟は、朱と緑青地に白で刺子状に表した遠山袈裟とし、縁は群青地に緑青と金泥で唐草文を表す。裏地は緑青、袈裟を吊る環の部分は、緑青を盛り上げていたためか絹が脱落する。袈裟は両足のほとんどを覆い、その一端が礼盤から垂下する。右肩に懸かる横被は、朱地に彩色の花丸文を散らし、金泥線で縁取られた周縁部は、緑青地に彩色の花丸文を表す。裏地は白とし、横被の一端が礼盤上に垂下する。わずかに覗く右足の袴は白、裏地を朱とし、白の沓には装飾は施されない。

二随臣は肉身肌色、輪郭は着衣ともども墨線で括る。淡墨の袍衣に濃墨で花唐草文の地模様を施し、裏地は朱色とする。白の袴には照暈が施され、白の下襲の裾は裏地を緑青で表す。面相は太子のそれほど繊細な表現ではないが、二臣の個性を巧みに描き分けている。太子の礼盤に敷かれた褥は、截金で縁取られ、朱具地に朱と白で花唐草文が細やかに表される。礼盤は丈高に表されるものの、格狭間の花形の削り込みはさほど複雑なものではなく、格狭間には装飾は

